

執行部 5部長に 聞く ③

時代の変化に対応した
学生募集

入学部長

国学院大学の大学運営を担う執行部と称される5部門(教務部、学生部、入学部、就職部、国際交流推進部)の各部長は、どのような取り組みを進めているのか。7月号では高屋景一入学部長(文学部教授)に語ってもらった。

本学の中期5カ年計画では「さまざまな背景を持った学生・教職員が共に学び合えるキャンパスの実現」を掲げている。それを踏まえ入学部では、現在、学生の多様性を担保すべく、外国人留学生、

首都圏(1都3県)以外からの入学者の獲得に重点的に取り組んでいる。一方で、少子化に伴い18歳人口が年々減少している中、大学にとっては、安定的な入学者確保も重要な課題のひとつである。入学部は附属・系列3高校や法人間協定傘下校をはじめとした高大連携事業の強化や、総合型選抜入学試験の充実、英語外部試験利用型入試の導入などを進めるとともに、オープンキャンパスやSNSでの情報発信など

4面に関連記事



夏越の大祓

心身の罪穢れを祓い清める

夏越の大祓が6月29日、渋谷キャンパス祭式教室で執行された。佐柳正三理事長、針本正行学長はじめ教職員らが参列し半年間の罪穢れを祓い清めた。

大祓は、毎年6月と12月の年2回、宮中をはじめ各地の神社で行われ、日常を過ごす中で知らず知らずのうちに積もった心身の罪穢れを祓い清めるもの。大祓詞を奏上し、白紙を人の形に切った人形で体を撫でたり、麻や布を裂く、茅の輪をくぐるなどの神事で罪穢れを祓い、無病息災を祈る。

本学では毎年、大祓に際して事前には渋谷・たまプラーザの両キャンパスで人形、和紙と禰の葉とを細かく切った切麻、お祓いの作法を記した用紙を頒布しており、在学生をはじめとした希望者が自宅等でお祓いができる機会を設けている。当日は事前に回収用の箱に託された多くの人形が、参列者の人形とともに祓い清められた。

みはるかすもの

「あつ、あそこで光ってるよ!」「えっ、どこどこ?」。今年6月初旬の東京都内、日没から約1時間の宵闇に親子連れの声が響いていた。指さす先にはゲンジボタルの光。蛍の観察スポットは、自然が少ない印象の強い都内や神奈川県内でも、意外なほどに点在している。本稿が世に出る頃にはハイケボタルの観察シーズンもほぼ終わっているが、ぜひ来年は夏の風物詩を楽しんでほしい▼一方で蛍の光は、そのはかなさからか、喪失のイメージとも結び付いてきたようだ。万葉集の長歌では、防人を務める夫の帰りを待っていた妻が、愛する人が亡くなった知らせを「蛍なすほのかに聞きて」

(蛍の光のようにかすかに聞いて)——というかたちで登場する▼中国新世代の女性SF作家・程婧波の短編「螢火の墓」(ケン・リュウ編『折りたたみ北京 現代中国SFアンソロジー』早川書房)は壮大だ。「青い水の惑星」から「新世界の(無重力都市)」へ逃れた語り手が生きる黙示録的世界。その終焉を強烈な光が告げる。「握った手から何千本、何百万本という光線が洩れ出てきます。宇宙でもっともまばゆい光です。握り拳いっぱい位の蛍の光です」(中原尚哉訳)▼蛍光灯の製造と輸出入は、令和9(2027)年までに段階的に廃止されることと決定している。明滅しながら闇の中へと飛び去っていく蛍を、今年もまた見送った。その姿は失われながら進んでいく時の流れそのものなのかもしれない。

健康増進を目的に、地域住民と学生が交流

たまプラ ウェルネスアカデミー2024開催



たまプラウェルネスアカデミー2024が6月8日と22日にたまプラザキャンパスで開催され、それぞれ約40人が参加した。写真。

本イベントは、地域住民の健康増進に役立てるため、人間開発学部の地域ヘルスプロモーションセンターが毎年開催している。

8日の第1回では、同センターの活動に携わる学生と教員が協力し、参加者の筋肉量、骨密度、血管年齢、認知機能の測定や、体力測定、栄養調査などが行われた。筋肉量の測定のために行われた片足の起立動作や大股歩行などの動作は、一見簡単そうに見えるが、意識しないと日常生活ではあまり使わない筋肉を使うため、参加者からは予想外の身体の状態や数値に驚きの声が上がった。

22日の第2回では、初回に測定したデータが細かなグラフなどに可視化・整理され、参加者一人一人に配布された。その結果を基に林貢一郎・人間開発学部教授と小林唯・同准教授による測定結果の解説とフィードバックが行われ、同年代の平均値と自身の状態を比較した上で、年齢を重ねることに生じやすくなる症状やリスクを予防、改善するための情報が提供された。

その後は、学生によって認知機能や主要な筋肉を刺激する運動が紹介され、参加者と学生と一緒に体を動かしながら交流を深めていった。参加者からは「運動の大切さを改めて実感できたので、日常生活に少しずつ運動を取り入れたい」という意気込みや「ストレッチを意識して、ビタミンCやポリフェノールを取るように献立を工夫したい」といった具体的な抱負が述べられた。

成績優秀者 69人を表彰



国学院大学は、令和6年度成績優秀者奨学制度の対象者69人を決定した。この制度は、前年度に著しい学業成績を収めた学生を表彰し、能力向上と勉学を奨励するもの。

表彰式は、6月19日に文・経済・法・神道文化学部が渋谷キャンパスで、7月10日に人間開発・観光まちづくり学部がたまプラザキャンパスで行われた。

表彰式では、針本正行学長のあいさつの後、各学部長・副学部長から奨学生一人一人に表彰状が授与された＝写真。

アカデミック・スキルズ講座

論証型レポートの攻略法を学ぶ



令和6年度のアカデミック・スキルズ講座の第3弾が6月19、20、26日と7月4日に渋谷・たまプラザ両キャンパスで開催された。この講座は、大学の授業などにおける学生の不安を解消するためのもの。今回は「論証型レポート攻略法」をテーマに開催された。

当日は教育開発推進機構の内村慶士助教が講師を務め、レポート課題で高評価を得るために必要なレポートをアウトライン化して理解する方法を解説＝写真。

論文をアウトライン化するワークを行った後は、内村助教から参加者へ「今日の解説点を振り返りながら、1ランク上のレポート作成にチャレンジしてほしい」と励ましの言葉がかけられた。

大学院進学相談会

進学希望者が多数参加



国学院大学大学院への進学希望者を対象にした相談会が6月29日、渋谷キャンパスで行われ、約100人が参加した。

はじめに、佐藤長門大学院委員長（文学部教授）が「本日は、各専攻・コースの教員が参加している。大学院進学にあたっての疑問は教員に質問して解消し、有意義な一日にしてほしい」とあいさつした＝写真。

その後、各研究科の専攻・コースごとに分かれ、カリキュラムの特長や入試制度などについて説明が行われた。また、参加者から事前に寄せられた質問に対する応答も行われ、会場は活気に満ちていた。

美しい伊豆創造センターと包括連携協定を締結

国学院大学（学長：針本正行）と（一社）美しい伊豆創造センター（代表理事：豊岡武士）は4月1日、世界から称賛され続ける地域づくりと伊豆半島全体の持続的な発展に貢献することを目的に、関連事業・催事の推進、相互協力を軸とした包括的な連携に関する協定を締結した。

今後は本学の知見を生かし、学際的な研究、人的交流、教育普及活動などさまざまな分野で協力・連携を図る予定。

第1回法学会講演会

WFPの活動から「国際公務員」の在り方を考える



国学院大学法学会が主催する令和6年度第1回法学会講演会「WFP国連世界食糧計画の活動から『国際公務員』を考える」が6月11日に渋谷キャンパスで開催された。本講演会は国際交流推進部の協力の下、法学部開講科目「国際組織法総論」と連携する形で実施。国際連合世界食糧計画（WFP）日本事務所代表の津村康博氏が講師を務め、本学学生を中心に約50人が参加した＝写真。

「昨年の推計となるが、世界では約7億8000万人が飢え、そのうち約3億3000万人が命の危険がある『急性飢餓』に直面している」と津村氏は説明。飢餓の要因として、気候変動が水など限られた資源を巡る争いを生み、政情不安を招く原因となっており、食糧危

機に拍車をかけるので、その悪循環をどう食い止めるのが課題だと述べた。

続いてWFPで働く「国際公務員」の在り方として「どの大学を出たかなど日本の学歴社会のようなものはWFPにはない。その人が何をしてきたか、何ができるのか、何ができるのか」と説明した。国際機関の一員として世界を舞台に働くための具体的な道筋を説明するパートに移ると、津村氏は「WFPなど国連機関への就職は、外務省が実施するジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）制度や国連ボランティアなどが登竜門」と語り、「WFPの職員にはゼネラリストが多い。仕事をしながらいろいろと学べる点が日本の企業に近い」と説明。学生に向けて「給食費を払えない家庭が増えてきているなど、飢餓問題で日本と世界はつながっている。子ども食堂でボランティアをするなど、まずは、やってみる」ことで飢餓について考えてはどうか」とアドバイスした。

講演後は学生らとの質疑応答が行われ、紛争地域などで活動することの危険性について問われた津村氏は「危険だと分かれば、活動は行わない。人道的需要があっても、スタッフを守れないのでは意味がない」と答え、国際支援活動のリアルな一端をのぞかせた。

第10回観光まちづくりカフェ URのまちづくりの実例を学ぶ



地域マネジメント研究センターが主催する第10回観光まちづくりカフェが6月26日、たまプラーザキャンパスで開催され、約40人が参加した。今回は「地方都市×観光×UR=サステナブルなまちづくりへの挑戦～鹿沼（栃木）、福山（広島）での取り組みから～」をテーマにUR都市機構の中條由規氏を招き開催＝写真。中條氏の講演では、鹿沼や福山における実際のリノベーション事例や、持続可能な都市開発にはマネタイズ成功例を共有することが大事だと語られた。質疑応答では、「限られたリソースの中で、日本全国でどのように都市の活性化が促進できるのか」など質問が絶えず寄せられ、会場は熱気に包まれていた。

第2回法学会講演会 結婚の平等を考える



第2回法学会講演会「結婚の平等（同性婚の法制化）の現状と今後」が7月1日に渋谷キャンパスで開催され、約50人が参加した。講師には、同性婚の実現に向けて訴訟を担当している（公社）Marriage For All Japan代表理事、「結婚の自由をすべての人に」訴訟 東京弁護士会共同代表の寺原真希子氏を迎え開催された。講演会では、判決文だけでは分からない訴訟の背景や司法・立法を通じた同性婚実現への取り組みなどが紹介された。同性婚の実現に向けて実際に行われている裁判の原告の考えや気持ちについても詳細に説明され、参加者たちは熱心にメモを取りながら耳を傾けていた。

外山勝志法人顧問 逝去

学校法人国学院大学顧問で明治神宮名誉宮司の外山勝志氏が6月1日に逝去。91歳。外山氏は昭和7年生まれ。31年国学院大学宗教学科卒。同年明治神宮に奉職し、平成6年宮司に就任。19年には同神宮から名誉宮司の称号を受けた。平成7年4月から23年4月まで学校法人国学院大学理事。12年3月から23年6月まで財団法人国学院大学院友会会長。23年より学校法人国学院大学顧問。

秦信行名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の秦信行氏が7月2日に逝去。75歳。秦氏は昭和24年生まれ。46年早稲田大学政治経済学部卒業、49年同大学大学院経済学研究科修了。経済学修士。（株）野村総合研究所勤務を経て、平成6年国学院大学経済学部助教授、7年教授、31年定年退職、同年名誉教授。在職中、経済学部長、入学部長などを歴任し、17年4月から27年4月まで学校法人国学院大学理事を務めた。専門はベンチャーファイナンス。著書に『ベンチャーコミュニティを巡って 起業家と投資家の世界』（武蔵野デジタル出版）など。

さらに阿礼の性別をめぐる論争は、一方で『古事記』成立にあたり阿礼の担ったという「誦習」がどのような行為であるかの議論を深めることにもなった。序文にしか確認できない稗田阿礼の人物像や『古事記』成立の役割については、現在もなお、諸説展開されている。

研究開発推進機構
准教授 渡邊卓

浴衣で彩る「和装DAY」

キャンパスに広がる和の魅力



日本文化を発信する一環として、例年、七夕にちなんで行われている「和装DAY」が、渋谷とたまプラーザの両キャンパスで7月5日に開催された。願いが込められた短冊が取り付けられた笹飾りや、風車、七夕飾りなどに彩られたキャンパスを、多くの学生が涼しげな浴衣姿で過ごしていた。

■「和装WEEK」で演舞や演奏など披露
渋谷キャンパスでは、1日から4日にかけて昼休みに部会・サークルの演舞や演奏を行う「和装WEEK」が開催された。青葉雅楽会による雅楽演奏や音楽研究会インサイドによる七夕ライブ、落語研究会による七夕寄席などがキャンパス

を盛り上げた。全学応援団のリーダー披露では、多くの学生が足を止め一緒に手拍子をしている様子が見られた。全学応援団団長の土屋一夏さん（法4）は「いつもよりたくさん人が来てくれて盛り上がった」「夏の始まりの雰囲気を感じられた」と笑顔で語った。

■短冊・七夕飾りで彩られるキャンパス
渋谷キャンパス内では、学生による風車や提灯の飾りつけも行われ、風が吹くたびに色とりどりの姿を見せる風車と七夕飾りがキャンパス内を彩った。笹飾りは、「単位が一つでも多く取れますように」「就活が早く終わりますように」など、思い思いの願いが込められた数多くの短冊に埋め尽くされていた。たまプラーザキャンパスでは、1号館エントランス通路の天井に天の川をイメージしたイルミネーションが設置され、七夕シーズンのキャンパスの夜を照らしていた。

■浴衣姿で「国大の夏」を演出
5日の「和装DAY」当日には、着付け講習会が催され、大勢の学生たちが浴衣などの和装に身を包みキャンパスを歩き交った。体育連合会による縁日コーナーも設けられ、射的、ヨーヨー釣りなどを楽しむ学生や、学生イベント企画リーダーに参加する学生たちの姿であふれた。また、藤澤紫・文学部教授による公開講座「遊べる日本美術特別編」が開催され、一般の方も浴衣姿で受講する場面も見られた。一部の教職員は、浴衣などの和装で授業や業務を行うなど、キャンパスは普段とは違う活気に満ちていた。

『古事記』の稗田阿礼をめぐる論争

昭和30年代の『國學院雑誌』

昭和30年代のこと、『國學院雑誌』誌上において現存最古の古典である『古事記』にまつわる論争が展開された。

『古事記』は、その序文によると天武天皇の勅命で稗田阿礼が誦習した帝紀や先代旧辞を、元明天皇の時代になって太安万侶が筆録し、和銅5（712）年に完成したとされる。『國學院雑誌』での論争は成立に携わった稗田阿礼の性別についてであった。稗田阿礼は歴史上、『古事記』序文にしか登場しない人物であり、そこには「時に舎人有り。姓は稗田、名は阿礼。年は是れ廿八。人と為り聡明くして、目に度れば口に誦み、耳に払るれば心に勒す」とある。阿礼の性別については、はやくに本居宣長が『古事記伝』において「稗田翁」「稗田老翁」としており、男性として認識していたが、平田篤胤になって女性説がおこった。篤胤は、稗田氏は女性が朝廷に仕えること、舎人をトネと読みこれが男女共通であること、阿礼というのが男性らしくないことを根拠に女性説を展開したのである。これは、のちに国学院教授であった井上頼国『古事記考』にも継承され、さらに柳田国男『妹の力』によって民俗学的見地から補強されることとなった。

ところが、この女性説については、多くの反論が出され男性説の主張が目立っていった。そのような中で、本学出身で実践女子大学教授であった三谷栄一が、『日本古典鑑賞講座 第2巻』（武田祐吉監修、昭和32年、角川書店）に「稗田阿礼と語部」を、つづいて『國學院雑誌』に「古事記と海人族の伝承―稗田阿礼をめぐる―」（同年12月）を発表し、女性説を支持したのである。これを受けて国学院大学教授の西田長男が『國學院雑誌』に男性説の立場から「稗田阿礼男性？女性？」（昭和33年11月）を発表したことで論争が巻き起こった。二人は、他誌上でも稗田阿礼をめぐる論文を発表し、三谷は『國學院雑誌』においては昭和36年、37年と女性説にまつわる論争を重ねた。この当時、二人のほかにも論争が発表されたが、その最たる論争は『國學院雑誌』で展開されたのであった。

インフォダイジェスト

大学からのお知らせ

OPEN CAMPUS 2024について

渋谷キャンパスとたまプラーザキャンパスの両キャンパスで同時開催します。学部・学科での学び、模擬授業、キャンパスツアーなどのプログラムを用意していますので、ぜひご参加ください。タイムスケジュールおよび模擬授業の内容は、大学HP（二次元コード）をご確認ください。



- 8月3日(土)、4日(日)、24日(日)
- 大学HP（二次元コード）からお申し込みください。
 - 8月3日、4日分は、申し込み受け付け中～7月28日(日)23:59 ※
 - 8月24日分は、8月5日(月)10:00～8月18日(日)23:59 ※

※来場予約は当日まで可能です

入課課(☎03・5466・0141、✉exam@kokugakuin.ac.jp)

オンラインイベントについて

国学院大学のことをもっと知りたいという受験生のために、スマートフォンやPCで参加できるLive配信のオンラインイベントを開催します。7月「～親子で聞く～受験生の夏休みの過ごし方」、8月「考古学実習を覗いてみよう!」など日程ごとにテーマが異なりますので、ぜひ何度でもご参加ください。

7月30日(火)、8月13日(火)、10月10日(木)、11月22日(金)、12月12日(木)

左記OPEN CAMPUS 2024の大学HP（二次元コード）からお申し込みください。

入課課(☎03・5466・0141、✉exam@kokugakuin.ac.jp)

令和7年度 大学院秋季入学試験

国学院大学大学院では、別表の日程で令和7年度の秋季入学試験を実施します。詳細は、大学院HP（二次元コード）をご確認ください。



大学院 令和7年度秋季入試日程

研究科	区分	専攻	募集人員	願書受付期間	試験日・合否発表（発送日）	手続き期間
文学	前期	一般	神道学・宗教学 10名	8月26日(月)～9月6日(金)	【試験日】 10月5日(土) (口述試験)	【一次手続き】 10月18日(金)～25日(金)
			文学 15名			
			史学 20名			
		外国人	神道学・宗教学 若干名			
			文学 若干名			
			史学 若干名			
	後期	学内成績選考	神道学・宗教学 若干名		【試験日】 10月9日(火) (口述試験)	【二次手続き】 令和7年2月25日(火)～3月4日(火)
			文学 若干名			
			史学 若干名			
		社会人	神道学・宗教学 若干名			
			文学 若干名			
			史学 若干名			
法学	前期	一般	神道学・宗教学 若干名	8月26日(月)～9月6日(金)	【試験日】 10月9日(火) (口述試験)	【一次手続き】 10月18日(金)～25日(金)
			文学 若干名			
			史学 20名			
		外国人	神道学・宗教学 若干名			
			文学 若干名			
			史学 若干名			
	後期	学内成績選考	神道学・宗教学 若干名		【試験日】 10月9日(火) (口述試験)	【二次手続き】 令和7年2月25日(火)～3月4日(火)
			文学 若干名			
			史学 若干名			
		社会人	神道学・宗教学 若干名			
			文学 若干名			
			史学 若干名			
経済学	前期	一般	神道学・宗教学 5名	8月26日(月)～9月6日(金)	【試験日】 9月20日(金)	【一次手続き】 10月4日(金)～11日(金)
			外国人 若干名			
			学内論文選考 若干名			
		学内成績選考	神道学・宗教学 若干名		【試験日】 9月27日(金)	【二次手続き】 令和7年2月28日(火)～3月5日(火)
			文学 若干名			
			史学 若干名			
	後期	一般	神道学・宗教学 5名		【試験日】 9月27日(金)	【一次手続き】 10月4日(金)～11日(金)
			外国人 若干名			
			学内論文選考 若干名			
		学内成績選考	神道学・宗教学 若干名			
			文学 若干名			
			史学 若干名			

国大学院事務課 (☎03・5466・0142)

令和6年度 ホームカミングデー

院友（本学卒業生）とそのご家族、ご友人、在学生、一般の方に、国学院大学へ集い親睦を深めていただくホームカミングデーを今年も開催します。一部企画を除き、どなたでも参加可能です。ぜひ本学へお越しください。また、参加団体企画の募集も行っています。(8月31日(土)締め切り)

参加団体企画の申し込みや当日の詳細などは、本学HP（二次元コード）でご確認ください。



10月13日(日)

場渋谷キャンパス

院卒業生とそのご家族、在学生、一般の方

無料

院校友課(☎03・5466・0787、✉hcd@kokugakuin.ac.jp)

夏季休暇中の事務休止日および事務取扱時間について

下記の期間、大学事務を一斉休止します。夏季休暇中の事務取扱時間は大学HP（二次元コード）でご確認ください。



8月3日(土)～9月16日(月・祝)の(土)・(日)・(祝)、8月9日(金)～21日(火)

後期授業開始について

学部・専攻科・別科・大学院の後期授業開始は9月21日(土)です。学年暦については大学HPなどでご確認ください。

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

志望企業発見セミナー

就職活動は、秋・冬のインターンシップや早期選考のルートに参加できるかどうかが重要です。夏のインターンシップに参加した人も、選考に通らず参加できなかった人もここからが勝負です。このガイダンスでは本学学生限定のイベント「企業セミナー」の活用方法、秋・冬インターンシップ、早期選考に向けた準備について解説します。

9月19日(木)

1～3年生

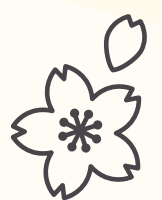
入学部

時代の変化に対応した
学生募集

部5
聞長に
く

確かな学力を有した 多様な学生の獲得を

入学部長・高屋景一



多様な学生が集う
キャンパスを目指す

入学部は入学試験委員会とともに、学生募集に関する業務全般を担当している。入学部は入学者選抜制度の中・長期的な方針を策定し、入学試験委員会は各年度ごとの学生募集、入学者選抜の実務を担っている。令和5年度に入学部は以下の課題に取り組んだ。第一に、安定的な入学者確保に向けた選抜制度と方法の検討だ。附属・系列3校や協定校との高大連携事業の計画と実施を進めた。例えば国学院高校とは学部学科単位で大学の学びを知ってもらうための模擬授業などを実施し、その成果を検証しながら今後継続するための取り組みを行っている。また、法人間協定傘下校とは、まずは大学と高校双方にとってより良い推薦入試の在り方の検討に着手した。本学中期5カ年計画の掲げる「さまざまな背景を持った学生・教職員が共に学び合えるキャンパスの実現」のため、首都圏（1都3県）以外からの入学者・志願者や留学生の獲得について、それぞれ目標を定めている。コロナ禍の影響で、受験生の地元志向が強まったものの、現在は都心回帰の潮流に戻りつつあるが、まだまだコロナ禍前の水準には及ばず、目標達成にはあと少しというところだ。地方から入学者を増やすため、全国8会場で入学試験を実施しているほか、地方での相談会やガイダンスを増やすなどの努力

を重ねている。外国人留学生にも、本学の魅力をより多く知ってもらうために、日本語学校などの連携も進めている。また、JPU E（日本大学連合学力試験）を利用した留学生入試を、観光まちづくり学部の令和6年度入試で初めて実施した。今後とも利用を継続して、留学生獲得の新たな展開の可能性を検討している。一方で、より良い選抜方法を開発するため、学力の3要素である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」が評価できているかどうかの検証も進めている。学力の3要素を見定めて入学者選抜はすでに一部制度で運用しているが、受験生自身が、学びたいことよりも入試の難易度を検討材料として優先することがまだ多い。選抜制度別の入学者の修学状況や成績評価項目、就職調査項目を検討し、各入学者選抜方法の妥当性を検証し、選抜方法の改善提案に活用したい。

第二に、学習指導要領改訂に伴う新課程入試への対応を行っている。一般選抜の科目については配点まで確定した。懸案だった「国語（近代以降の文章）」の配点変更も確定し、本学HPや入学案内等で告知している。英語の外部検定試験利用については、従来もB日程で本学独自試験と併用していたが、令和7年度入学試験からA日程3日目に

今後の課題としては、18歳人口の減少に対応できるよう、志願者確保のための中・長期的戦略の策定を引き続き進める。学内関連部局とも協働して、新たな入学試験制度・方式の可能性を探る。これからの入学者選抜は、入学者選抜制度のみならず、大学のカリキュラム、留学制度、奨学金をはじめとした支援体制、就職に向けたサポート体制などについて細やかな説明を通じて、受験生、親、高校との関係を構築することが鍵になる。そのためにも手間をかけて附属・系列校との高大連携事業を拡充したり、法人間協定傘下校との連携を強化することが必要になる。

令和7年度一般選抜改革の目玉である英語外部試験利用型については、受験生の需要を検証し、出願要件以外の利用方法などの検討を進めていく。安定的な入学者確保のためには、高校生が本学を知る機会を増やすことが重要だ。毎年8月には3回にわたり、オープンキャンパスを開催しており、昨年は合計約1万5000人を超える受験生・保護者が参加した。さらに、他大学との合同進学フェアも開催している。最近では動画を視聴する高校生が多いことから、バーチャルキャンパスやオンラインイベントなどのコンテンツを充実させている。昨年は、史学科が長野県の安曇野で毎年調査している古墳発掘の様子を紹介したライブ配信が話題になり、SNSでの発信を含め、引き続き入試広報の充実を図っていききたい。



たかや・けいいち 文学部教授。Ph.D. (Education) 専門は教育哲学、思想史、カリキュラム論。主な著書にTeaching and Learning Outside the Box: Inspiring Imagination Across the Curriculum (Teachers College Press, 2007: 共編著)、Jerome Bruner: Developing a Sense of the Possible (Springer, 2013) など。主な翻訳書にメアリー・ウォーノック著「考えるあなたのための倫理入門」(春秋社, 2022) など。



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ 学校法人国学院大学特別参事。人間開発学部初代学部長、専門は教育社会学、人間発達学。新しい時代の子育て論には定評。

自分が自己を見つめる、自ら「なる」人育てを

今年の東都大学野球春季リーグでは、国学院大学硬式野球部は苦戦を強いられましたが、私自身、1部と2部の入れ替え戦を覚悟し、手帳にその日程を書き込んだほどでした。しかし、最終の3連戦で奇跡の3連勝。1部リーグ残留を決めました。十数年前、本学が2部リーグに降格したことがありました。その時の感動の場面を思い出します。授業が終了した時のこと、数人の硬式野球部員が一列に並び「申し訳ありません」と一礼。そして、次の一言でした。「私たちは知りました。各チームの戦力にそれほど違いはありません。違ふ方を知っている、勝つていないだけでした」前回、国学院大学の「告諭」にある「本立ツル」にいう日本の伝統文化に基づいた神道精神を基礎とする子育てについて触れました。具体的には、欧米の子育てが、他者が「つく（造）る」子育てに対し、「古事記」「国生み」に見られる我が国のそれは、自らが「なる」「なろう」とするよう支援する子育て、これを体現したような彼らの言動に感動を覚えたのです。彼らのそれは、自分が自分の主人公であるとうとする「主体化」に向けた言動であり、それはまた、自ら「なる」「なろう」とする意欲を前提とするものでもありました。総じて言えば「自己が自己を見つめる」姿です。本学の鳥山泰孝硬式野球部監督の指導方針は、自分の課題を各自見いださせ、その解決法を自分なりに認識、実施し、その結果を見据えた反省を次の自己課題の探究に生かす、というサイクルで一巡すると聞いています。筆者の知る限り、本学では、陸上競技部の前田康弘監督をはじめ、他の監督も、これと同様の「自ら」なる」を支援する指導方針のようです。平成元（1989）年の学習指導要領改訂以降、我が国の学校教育も遅ればせながら従来の「つくる」「つくられる」教育から



大学生観光まちづくりコンテストで 新規性の高い提案が評価され JTB 賞を受賞

辻響輝さん(観まち3)・小村恋晴さん(観まち3)(左から)

観光まちづくり学部1期生の辻響輝さん=写真左=と小村恋晴さん=同右=が、大学生観光まちづくりコンテスト2023に挑戦し、見事JTB賞を受賞した。学部としても初の快挙を成し遂げた二人に話を伺った。

テーマは 福島復興ステージ

辻響輝さんと小村恋晴さんが挑戦した大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会事務局が主催する大学生観光まちづくりコンテストは、平成23(2011)年から続く大会。毎年多くの大学生チームが参加し、指定エリアから一つ以上の市町村を選び、その地域が提示する選択コンテンツと自由コンテンツを組み合わせ、地域の課題解決や発展につながる観光まちづくりプランを競う。令和5(2023)年のテーマは、【福島復興ステージ】。県内の12市町村から二人は川内村を選び、選択コンテンツである“かわうちワイン”“テントサウナ・川Sup”“かわうち祭り”の中から、一番身近なワインを糸口に村と出会っていった。最初はワイン単体で考えていたが、特産のイワナ料理×ワインなど、ワインと何かを掛け合わせようと思いつく。図書館やインターネットで村の歴史や産業などを調べるうちに、かつて養蚕が盛んだったことを知る。そのとき、“ワイン染め”がひらめいた。さらに染め物について調べていくと、川内村の産品であるシイタケやソバ、木炭でも染色が可能と分かり、イメージが広がっていく。そうして特産品での染色を核としたプランの方向性が決定した。

地域との交流による 気付き

フィールドワークでは、村長など行政関係者はもちろん、特産品の事業者に会って村の話を伺いながら、プランの骨組みを説明し賛同を呼びかけた。その過程では、どのような苦労や気付きがあったのだろうか。

「地域の中でも、観光化に肯定的な方ばかりではなく、反対意見を持つ方や震災に関連するものならば賛成だという方もいて考えさせられました。被災地を訪問する観光のことをダークツーリズムといいます。川内村の復興のプロセスや役割を発信したいとの思いを感じました」と語る辻さん。川内村は、震災直後は避難地域に指定されたが、1年後には他地域から避難した人たちの受け入れ先になっていたという。

「けれども、避難先で仕事を見つけるなどして村

に戻らなかった住民の方もいて、調査のために道を歩いても、人も車も見かけない……。なんとかして関係人口を増やす提案をしたいと強く思いました」と語る小村さんには、新たな気付きもあった。

「私は学芸員を目指しているのですが、聞き取り調査を重ねるうちに、学芸員に求められる“聞き出す力”とのつながりも感じました。こちらの聞きたいことを聞くのではなく、相手の思いをどう聞き出すか。本当の思いを話してもらえることが大事だと気付きました」

地域の人たちの思いを受け止め、情報を整理し、アイデアを膨らませる日々。それをかたちにしていかなければならない。応募を決めたのが6月初旬、締め切りは8月中旬という過酷なスケジュールの中で、提案書と60枚ものスライドを作成した。

「二人しかいないので、隙間時間を活用してそれぞれができることをやりました。辻くんは、時間は守るし、アポイント取りやデータなど、なんでもきっちり整えてくれる。本当に頼りになりました」

「小村さんは誰に対してもフレンドリーで、村の人たちの中に飛び込んで、話しやすい雰囲気をつくってくれましたね」

お互いの個性を生かし、リスペクトし合いながらの活動だったことがうかがえる。

快挙をもたらした 新たな可能

第1次選考は書類審査のみで、応募した107チームから11チームに絞られた。通過の知らせを受けたのは9月に入ってからで、発表本番まで10日ほどしかない。喜んだのもつかの間、プレッシャーが押し寄せてくる。本番は10分間で説明、質疑応答5分の形式だが、スライドに合わせて原稿を作成し試行したところ、なんと8分もオーバー。提出したスライドは修正できないため、指導教員の石垣悟・観光まちづくり学部准教授とともに、原稿をブラッシュアップすると同時に役割分担も考え、必死にプレゼンの練習を重ねた。当日は緊張しすぎて記憶がほとんどないと話す二人だが、特産品を甦らせ染め物という新たなコンテンツを生み出した新規性が審査員から高い評価を受け、見事グランプリ、準グランプリに次ぐJTB賞に輝いた。大学としても前例のない挑戦だったが、苦しみながら結果を出した二人。この

経験は、なにか変化をもたらしたのだろうか。

「西村幸夫学部長に褒めていただけてうれしかったですし、他の先生方にも認知されて、いろいろな相談がしやすくなりました。また、学部の仲間と話題にしたり、今年チャレンジする後輩にアドバイスをしたりと、この挑戦をきっかけに交友関係が広がりました」と小村さん。

まだ新しい観光まちづくり学部にとって、1期生の二人の快挙は大きい。この経験を共有することで、これからの学びや挑戦の可能性が広がるはずだ。

「コンテストで改めて気付いたことは、その地域に暮らす人たちが何を大事にしているか見極めることが重要だということです。その地域の人が誇りに思っているもの、軸にしているものを重点的にピックアップしていく力が少しずつついてきたと実感しています」

そう語る辻さんは、今後も学び続け、授業で出会った竹富島の環境保全の仕事をしたいと意欲的だ。

大きな学びと発見を得た二人に、最後にまちづくりとは、と問うてみた。

「地域の人たちが、気持ちよく暮らせる生活をつくることが第一。そしてそれと同等に、人々が大切にしているものを守りながら活用していくことだと僕は考えています」と辻さん。

「同感です。他に言えることとして、地域経済を循環させるためには他地域からの人材も大事だと考えます。地域の景観や資源を生かして観光スポットをつくるなどしてリピートにつなげていく。まずは若者をターゲットにするのが鍵だと思います」と小村さん。

キャンパスでの学びと、フィールドワークでの気付きを両輪として、求められるまちづくりを追求する。日本を地方から元気にしていく発想力と行動力に期待したい。



インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定

東京デフリンピックで 金メダルを。 その目標に向かって、 日々、一歩前へ

牧野陽菜さん(中文2)

聴覚障がい者のためのオリンピックであるデフリンピックが、令和7(2025)年に東京で開催される。国学院大学卓球部の牧野陽菜さんは、この大会に日本代表として出場を目指す。日々、練習に打ち込む彼女に、卓球との出会いから今日までの歩み、喜びや苦しみ、未来にける思いを伺った。

逆境をはねのけ 世界大会銀メダル

小学校時代はテニスとサッカーのスクールに通い、デフリンピックを目指していた牧野さん。進学した中学校に、それらの部活がなかったことで卓球と出会った。卓球部は中高合同で活動していて、ろう学校の大会では最高峰の全国聾学校卓球大会で優勝の実績を持つほどの強豪校だったが、中学2年で既に部内では敵なしになってしまったというから驚きだ。日本ろうあ者卓球協会ユースの部の強化指定選手に選ばれ、その合宿でデフリンピック4冠獲得の監督から「目指せば、デフリンピックに行ける」と言われ、卓球一本に絞って本気で目指すことを決意。それまで続けていたテニスのスクールをやめて卓球のスクールに入り、厳しい練習を自らに課す。高校は悩みに悩んだ末、より強くなるために一般高校の強豪校に進学した。

「ろう学校には1歳の頃から通っていたので、幼なじみたちと別れるのは本当につらかったですね。でも、デフリンピックを目指して頑張れと送り出してもらい、その目標のためにやれることはやるという覚悟でした」

しかし、高校へ入学した令和2(2020)年はコロナ禍で通学できず、インターハイも中止に。生活面でもマスク着用を含め慣れない環境の中で苦戦。卓球だけに力を入れる余裕がなく、結果が出ない日々だったという。それでもひたむきに努力を続け、高校3年の2月に世界ろう者ユース卓球選手権大会の最終選考会で優勝し、出場権を獲得。大学入学後に日本代表として参加した本大会では、見事銀メダルに輝いた。

自分を信じることから 生まれる強さ

実は最終選考会の1カ月前に行われた1次選考会は決勝で敗れ、メンタル的にも大きく落ち込んだという。どうやってそこから立ち上がったのだろうか。「とにかく自分を変えるためにできることは何かと考え、まず“人に頼る”ことと“コンディショニングの見直し”をしました。特に人に頼ることに限っては、これまで卓球に関する悩みを一人で抱え込んで

しまい、解決できずに成績が伸び悩んでいたと気付いたんです。この敗戦を機に、周りの人を頼り、アドバイスをもらって実践するという、“自ら積極的に動く”ことを覚えました」

それによりメンタルを立て直し、望む結果を手にした経験は大きな自信になった。

「高校時代は、試合中に新しいことに挑戦しようとしたり、結果を気にしていました。けれども、大学に入ってから、試合につながる練習を積み重ね、本番ではその時点でできることをやり切ることに集中するようになりました。ここまで頑張ったんだから負けても仕方がない、と思えるまで練習する。そんな自分を信じて戦えるようになったんです」

卓球は球が風を切る音や台に弾む音からも判断してプレーするが、デフの大会では補聴器の使用が禁じられており、すべて目で見て判断する。スタイルもリズムもまったく異なるため、常に補聴器なしの状態で練習するのが理想だ。そのためには、コミュニケーションや指示などは部員の理解と協力が必要になる。そこで、それまで周りに言えなかった聴覚の状況や会話についてのお願いなどを伝えられるようにしたところ、部員からの応援やサポートも感じ取れるようになった。自分が変われば周りも変わることを実感したという。さらに、大学では先輩やコーチをはじめ知り合いが増え、一人で試行錯誤するのではなく、いろいろな人に質問ができるようになったことも大きい。

「卓球には正解がないので、さまざまな意見を聞いて、自分に合っていると判断すれば取り入れ、自分の中で正解をつくっていくという感じです。私の人生として卓球があるので、自分がまず納得して、結果にも責任を持ちたいんです」

金メダル、 そして未来へ

令和7(2025)年デフリンピックは東京開催のため、家族や幼なじみなどこれまで支えてくれた人たちが観戦しやすい。みんなの前で金メダルをとることが、目下の目標だ。かつてフェンシングでオリンピックの代表選手を目指していた母親が、食事面をはじめ陰に日なたにサポートしてくれている。

「祖母には『陽菜の頑張りが生きがい』と言われていて、世界大会の後にはろう学校の仲間に『自慢の

幼なじみだよ』と喜んでもらえた。みんなの思いが力になっているんです。だから金メダルで恩返ししたい。それは日本の卓球への恩返しにもなりますし」

女子選手は4人出場できるが、2024年2月時点のランキングは6位。年内の選考会で、あと二つ上げなくてはならない。

「2月の大会でも、私としてはとても出来が良かったです。優勝した選手とも接戦でしたし……あと一歩のところに来ています。課題を練習でクリアし、やれることを全力でやりつくします。やりつくしたことを信じられるかという気持ちの強さで本番が変わってくるから」

国学院大学卓球部のスローガンは“今、一歩前へ”。牧野さんは強豪ぞろいのチームの中でもまれ、日々、収穫が得られているという。

「収穫は求める気持ちがないと得られないもの。学ぶ姿勢がないと収穫に気付けない。収穫を感じられるのは喜びですし、小さな収穫の積み重ねが結果につながると信じています。まさに“今、一歩前へ”の毎日です」



牧野さんが国学院大学に在籍しているのは、卓球の練習環境面のほかに、国語の教師になりたいという子どもの頃からの夢に近づく場所でもあったからだ。中国文学科では、中国思想とスポーツを結びつけて学んでいるという。特別支援学校の教員免許も取り、未来の子どもたちがデフリンピックに挑戦する後押しをしたいとも考えている。しかし、当面は、卓球に集中だ。卒業後は実業団かプロで競技を続ける。スポーツの楽しさや厳しさ、社会の厳しさ、その両方を知った上で教師になる意義も自覚している。通学に2時間、週6日の部活、そして勉強も手を抜かない。一日一日を大切に頑張ることが、のちの勝敗を決めると、自らに言い聞かせるようにうなずく。その胸には日の丸がある。

インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定

柔道部

全日本学生柔道優勝大会
2年連続ベスト8

男子第73回・女子第33回全日本学生柔道優勝大会が6月22、23日に日本武道館（東京都千代田区）で開催され、国学院大学柔道部は男子の部で昨年に続きベスト8となった。本大会は、各大学7人の代表選手による点取り式トーナメント形式。体重無差別で行われるため、重量級の選手を多く擁する大学が有利と言われている中、軽量級を得意とする本学柔道部の奮闘が際立った。

同部は昨年に行われた同大会でベスト8となったためシードとなり、3回戦からのスタートとなった。3回戦では京都産業大学と対戦。先鋒の清水雄護選手（経2）が背負い投げで一本勝ちを収めると続く選手も多数一本勝ちを決め6-0と快勝した。

4回戦は桐蔭横浜大学と対戦。2勝1敗3分けで迎

えた大将戦で小林開道選手（法3）が、残り50秒で背負い投げを決め一本を奪い勝利する。結果、4回戦を3勝1敗3分けで突破した。準々決勝では中央大学と対戦。2試合目までは2分けとお互い譲らない展開の中、3番手の五将・中村俊太選手（健体4）が開始1分に内股で技ありを奪う。続いて2分53秒に大内刈りで技ありを奪い、合わせ技一本で1勝を先取した。続く4試合目では一本を取られ1勝1敗2分けとなる。その後、5試合目から7試合目まで3戦連続で引き分けが続き、1勝1敗5分けという大接戦で迎えた代表戦では中村選手が出場するも裏投げ一本で敗れ、2年連続でベスト8という



男子の部でベスト8となった本学柔道部選手（同部提供）

結果となった。

なお、中村選手は本大会で技術が優秀と評価された選手10人に贈られる優秀選手賞を受賞した。優勝は15年ぶりに決勝に進んだ天理大学を降した東海大学で2年ぶり27度目。

ソフトテニス部

大学王座決定戦 女子が全国2連覇



全国2連覇に笑顔を見せた同部女子（同部提供）

第44回全日本大学ソフトテニス王座決定戦が、6月7日から9日に長浜バイオ大学ドーム（滋賀県長浜市）で開催され、国学院大学ソフトテニス部女子が優勝し、2年連続日本一に輝いた。

この大会には、全国9地区の春季リーグ優勝・準優勝校の18校が参加。同部女子は関東学生春季リーグで準優勝し、出場権を獲得した。初日の予選リーグ初戦に松本大学と対戦した同部女子は、第1試合で庄司琴里選手（初教4）・高嶺心萌選手（中文3）ペアが4-0のストレート勝ち。第2試合では濱島怜奈選手（初教3）が4-1で危なげなく勝利を収め、第3試合の久保田茜選手（日文4）・原千晴選手（中文4）ペアも相手ペアを圧倒し4-0と全勝で白星スタートを切った。第2戦の四国大学にも2勝1敗で勝利を収め、準決勝リーグへの進出を決めた。

2日目の準決勝リーグは、第1試合で仙台大学と対戦。3試合とも相手に1セットも与えることなく完全勝利した。続く、第2試合では、神戸松蔭女子学院大学と対戦。濱島選手が2-4で敗れるも、久保田選手・原選手ペアが5-2、庄司選手・高嶺選手ペアが5-1とダブルスで堅実な試合運びを見せ、2勝1敗で勝利した。

最終日の優勝決定戦では関東学生春季リーグで優勝した日本体育大学と対戦。庄司選手・高嶺選手ペアが最終ゲームまで僅差で進み、4-5と接戦の末に敗れるも、濱島選手が4-3と最終ゲームを制し勝利した。第3試合も最終ゲームまでもつれる接戦となったが競り勝ち、5-4で勝利。2勝1敗で日本体育大学を降した同部女子は見事に2年連続で優勝を飾り、選手たちは全国2連覇の偉業達成に満面の笑みを見せていた。

硬式野球部

神里選手・柳舘選手
大学日本代表として
優勝に貢献

国学院大学硬式野球部の神里陸選手（神文4）と柳舘憲吾選手（法4）が、7月6日から20日にかけてチェコとオランダで開催された「第43回プラハベースボールウィーク」、「第31回ハーレムベースボールウィーク」に大学日本代表（侍ジャパン）として出場した。

神里選手、柳舘選手は、今年春の東都大学野球1部リーグ戦とともに同部の主力選手として開幕からスターティングメンバーに名を連ね、12試合に出場。攻守にわたってチームに貢献している。

7月6日から10日にかけて開催された第43回プラ

ハベースボールウィークでは、9カ国が参加し、日本代表はチャイニーズ・タイペイ、チェコ、ドイツと対戦した。10日に行われたチャイニーズ・タイペイとの決勝戦では、柳舘選手は6番サード、神里選手は8番キャッチャーでスタメン出場。柳舘選手は1-2の劣勢で迎えた一回裏、ツーアウト・三塁のチャンスで打席が回ってくるとライトへの同点タイムリーヒットを放った。神里選手も4打数2安打の活躍を見せ



大学日本代表に選ばれた神里選手（左）、柳舘選手

た。最終的に試合は5-3で勝利し、両選手は大学日本代表の優勝に大きく貢献した。